

PROFILE



上村 文乃 (チェロ)

Ayano Kamimura, Cello

6歳よりチェロをはじめ、桐朋学園大学ソリストディプロマコース、ハンブルク音楽演劇大学、バーゼル音楽院、スコラカントゥルムバーゼル(古楽科)にて学び7年間の留学を終え2020年に帰国。

第5回東京音楽コンクール弦楽部門第2位、第4回ルーマニア国際音楽コンクール弦楽器部門第1位、第80回日本音楽コンクール第2位、イタリアトレヴィーゾ国際音楽コンクール優勝など

入賞歴多数。2022年に第23回ホテルオークラ音楽賞受賞。第2回インディアナポリス国際バロックコンクール優勝。

これまでに東京フィル(小林研一郎)、読売日響(下野竜也)、京都市交響楽団(鈴木優人)、ワロニー王立室内管弦楽団(フランク・ブラレイ)、バーゼル交響楽団(クリストフ・ゲトショルド)等と共演。また、霧島国際音楽祭、宮崎国際音楽祭、東京・春・音楽祭、ル・ボン国際音楽祭、アスペン音楽祭(アメリカ)、チェロビエンナーレアムステルダム(オランダ)、モニゲッティ&フレンズ(スイス)等の音楽祭に出演。

チェロを熊澤雅樹、井上雅代、毛利伯郎、堤剛、アルト・ノラス、イヴァン・モニゲッティ、ソル・ガベッタの各氏に、室内楽を原田幸一郎、徳永二男、カルテット・エクセルシオの各氏に、古楽奏法をクリストフ・コワン氏に師事。

トリバルティ・トリオやバッハ・コレギウム・ジャパンのメンバーとしても活躍中。モダンチェロの演奏にとどまらず、ビリオド楽器を用いた歴史的演奏法にも取り組み、双方において第一線で活躍の場を広げる稀有なチェリストである。2024年2月第22回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

オフィシャルHP <https://www.ayano-kamimura.com/>



松本 和将 (ピアノ) Kazumasa Matsumoto, Piano

幼い頃よりピアノに目覚め、第67回日本音楽コンクール優勝(併せて増沢賞はじめ全賞を受賞)を始めブゾーニ国際ピアノコンクール、エリーザベト王妃国際音楽コンクールなど数多くの受賞歴を持つ。

ソロ、オーケストラとの共演、室内楽まであらゆる編成で多彩な輝きを放ち続けるピアニストとして、観客はもちろん、世界中の演奏家達からも注目を集めている。

室内楽に特化した「愛知カンマームジークアカデミー」を設立し室内楽の普及と人材の育成に努める。これまでに22枚のCDをリリース。名古屋音楽大学ピアノ演奏家コース 客員准教授として、後進の指導にもあたっている。

オフィシャルHP <http://www.kaz-matsumoto.com>

人のいるところには
夢が
いる。



JAPAN ARTS

上村文乃 チェロ・リサイタル

AYANO KAMIMURA CELLO RECITAL

A OF CELLO

Vol.1

2025年1月25日(土) 14:00

王子ホール

2:00p.m., Saturday, January 25, 2025 at Oji Hall

主催：ジャパン・アーツ

PROGRAM

コダーイ・ゾルターン：**無伴奏チェロ・ソナタ 作品8** 〈31分〉
KODÁLY Zoltán：Sonate pour violoncelle seul Op.8

細川俊夫：**チェロソロのための「黒田節」** 〈3分〉 ※日本初演
HOSOKAWA Toshio: “Kurodabushi” for Cello Solo (2024)

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ：**無伴奏チェロ組曲 第1番 BWV1007** 〈15分〉
Johann Sebastian BACH：Suites á Violoncello Solo senza Basso BWV1007

* * * * *

スティーヴ・ライヒ：**チェロ・カウンターポイント【チェロ・テープ版】** 〈11分〉
Steve REICH：Cello Counterpoint Version for Solo Cello and Tape

セルゲイ・ラフマニノフ：**ピアノとチェロのためのソナタ 短調 作品19** 〈33分〉
Sergei RACHMANINOW：Sonate pour Piano et Violoncello Op.19

ピアノ:松本和将

MESSAGE

芸術は、その時代を生きた人の証、そして社会をうつしだす鏡です。

人間は、醜さも心に秘めています。

欲深く、卑しく、邪念にまみれている。

でもそれは、なにかより良く生きたいという気持ちがあるゆえなのではないでしょうか。

良いことも悪いことも、どんな気持ちでさえ、芸術にぶつけると、違う次元に昇華され、力を持った真に美しいものとして清めてくれます。

音楽が、単に心地よいものとしてではなく、心の本質を導くものとなり、活力を与える力となりますように。強く、心美しく。

みなさま

ご来場いただき、本当にありがとうございます。

A of Cello 第一回、開幕です。

上村文乃

PROGRAM NOTES

上村文乃

コダーイ・ゾルターン(1882 - 1967)：**無伴奏チェロ・ソナタ 作品8** (1915)
KODÁLY Zoltán：Sonate pour violoncelle seul Op.8

コダーイは、今でこそ母国ハンガリーを代表する大作曲家ですが、当時はブラームスから色濃く影響を受ける保守的な時勢だったため、音楽院の中でも風あたりが強かったそうです。

作曲のみならず、民族音楽学者、教育者、言語学者、哲学者として活躍した彼ですが、私が1番注目するところは、彼の探究心です。

盟友であるバルトークは、コダーイの事を『―調査研究に対する烈しい情熱、根気強い勤勉さ、徹底性、知識の深さ、鋭い洞察力、こうしたものによって、彼は、ハンガリー農民音楽の唯一の徹底した理解者になったのです。―』と評しています。

この作品では、通常の5度調弦ではなく、低弦2本が半音下げて調弦するように指示され、かつてない音色のひろがり、また民族楽器を模した超絶的な奏法が特徴的です。

ほとぼる熱量、緊張感、壮大な作品の中に込められた物語は、奏者と聴者、両者の精神力、身体力を試されます。

- I. Allegro maestoso ma appassionato
- II. Adagio (con grand'espressione)
- III. Allegro molto vivace

細川俊夫(1955 -)：**チェロソロのための「黒田節」** (2024)
HOSOKAWA Toshio: “Kurodabushi” for Cello Solo (2024)

私は、どんな演奏会でもなるべく邦人作曲家を取り上げるようにしています。それは、自分のルーツを感じられ、同じ言語を母国語として持つ者として、より深い共感を得られるのではないかと思うからです。

細川俊夫先生のチェロ作品は、近年、無伴奏チェロのためのSmall Chant(2012)、チェロとオーケストラのための「昇華」(2016)を演奏させていただく機会がありました。

細川先生の作品には、なにか思慮深いものを感じます。日本人の心の豊かさ、繊細さ、それがチェロのふくよかな音色とびつたりマッチしていると感じます。

細川先生御本人からいただいたメッセージです。

“この作品は、友人の作曲家、Federico GardellaとVincenzaの2024年9月30日のイタリア、コモ湖の歴史的なサンタッポンディオ教会での結婚式のお祝い先品として作曲し、Michele Marco Rossiのチェロによって同教会で初演された。「黒田節」は日本の福岡県の民謡であり、平安時代の雅楽の今様から生まれてきていると言われている。日本では、結婚式などのお祝いの席で、よく歌われる。チェロのピチカートによる響きは、日本の箏を連想させる。”

細川俊夫

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685 - 1750)：**無伴奏チェロ組曲 第1番 BWV1007**
Johann Sebastian BACH：Suites á Violoncello Solo senza Basso BWV1007

バッハは「音楽の父」と言われる偉大な作曲家です。しかし、生前は現在ほど有名なというわけではなく、家族を大切にする「子煩悩な父親」でした。産まれた子供はなんと20人!(内10人は死別) あたたかい人柄は作品にも表れていると思います。この無伴奏作品もどんな人も受け入れるような懐の深さがあり、自然に音楽に身を委ねることが出来ます。

対位法(英:カウンターポイント)の大家と呼ばれるバッハですが、綿密に設計された建築物のような揺るぎなさを感じます。

チェリストにとって、生涯通して大きく立ちはだかる作品が、全六曲あるこの組曲といっても過言でないと思いますが、今回シリーズ初回として、第一番を演奏します。

- I. Prelude
- II. Allemande
- III. Courante
- IV. Sarabande
- V. Menuet I and II
- VI. Gigue

スティーヴ・ライヒ(1936 -)：**チェロ・カウンターポイント【チェロ・テープ版】** (2003)
Steve REICH：Cello Counterpoint Version for Solo Cello and Tape

ライヒはアメリカのニューヨークで生まれ育ち、現代音楽のムーブメントでもある“ミニマルミュージック”の先駆者です。

この作品は8パートのチェロによって構成されており、今回演奏するにあたり7パートを事前に私自身が録音し、本日ライブでその録音と共に演奏します。

実際に録音をしていて私が感じたことは、動物として見た人間と、文明を築いていくための原動力のようなものが拮抗しているということです。

私たちが持つ感覚、データとしての波形、目まぐるしく移り変わる文明、この社会に帰属していく人間、それらと共に、人間がどうあるべきなのか、考えさせられる気がします。

ライヒ独自のグルーヴ感、ハーモニー感は聴く者にある種の酩酊感を与えます。

本日の演奏は2025年バージョンですが、また録音もアップデートし演奏の機会を設けたいです。

三楽章形式ですが、楽章間は隙間なく演奏されます。

セルゲイ・ラフマニノフ(1873 - 1943)：**ピアノとチェロのためのソナタ 短調 作品19** (1901)
Sergei RACHMANINOW：Sonate pour Piano et Violoncello Op.19

幼少期は大変活発でいたずら好きの子どもだったラフマニノフ。好きな遊びの一つは、速度を出して走っている馬車に飛び乗ったり、そこから飛び降りたりすることでした。ただ、大好きな祖母といるときだけはおとなしく、愛情をたくさん受けながら、一緒に教会の礼拝に付き添い、聖歌や聖堂に鳴り響く鐘の音に包まれた経験は、幼いラフマニノフに強い印象を与えました。

その後厳格なモスクワ音楽院での生活を経て、性格も変化し自分を抑えて感情を表に出さなくなったそうですが、仲の良い友人の前では人を引き込むような笑いを起こし、それはラフマニノフの生涯にわたる特徴となりました。

交響曲第一番初演の大きな失敗後、うつ状態になり困難な時期を過ごすも、ロシア私立オペラでの初めての指揮者として登壇、また催眠療法医の治療によって次第に気持ちが明るくなり、仕事にも自信を持ってあたれるようになりました。その中で大成功を取めたのが、ピアノ協奏曲第二番や、このチェロソナタです。

ラフマニノフの挙式で新郎付添人もするほどの仲だったチェリストのブランドゥコーフに献呈されています。

生前彼が言った言葉を添えて…

『…自分にとってどんな言葉も意味はない、すべては自分の作品に表れており、演奏の中で表される…』

- I. Lent - Allegro moderato
- II. Allegro scherzando
- III. Andante
- IV. Allegro mosso